

平成二十二年十一月一日発行（毎月一回一日発行）通巻八五〇号

火星

平成二十二年十一月号



七曜抄
(七)

山尾玉藻

青年のつつ立つてゐる野菊かな

ビールカーの後にまはる秋の蠅

手話ふたり花野の人となりゆけり

何ごともなく日の暮の蓮の実

椿象が暈をあるく十三夜

石仏の笑みゆきわたる穂草かな

大ざつばな行く手ありけり真葛原

へうたんの形を雨のすべりをり

吾亦紅おぼつかなくも触れ合はず

蛸薬師出でていよいよ秋の風

太白星

柳生千枝子

夏海の波頭片々ガラス光
蟬声の群のリズムの眩しさよ
冷房の図書室に遇ふ五十六記
空襲の真夜に見し月忘れ得ず
月仰ぐ青春喪失世代にて
台風来夕べ五彩の雲走り
月蹤いて来よ帰り路遠ければ

杉浦典子

ふりむけば大夕焼にさらはるる
野仏はどこか欠けをり晩夏光

流れ星子は子の家に帰りけり
唄なげきたれば踊りの輪のゆがむ
山栗の坂をまろべる月明り
星とんで恐竜の骨出でし峡
手に受けてつめたきいろの花茗荷

浜口高子

水煙を鳥声こぼる秋はじめ
秋めくやボートが一つ裏がへり
ひぐらしの谿より届く手漉き和紙
蝉声の止んでまたすぐ昼の月
貧乏かづら風に葉裏の艶めけり
無口なりし夫に供ふる青蜜柑
旅終へし鞆の底の青蜜柑

火星作品

山尾玉藻選

夕立のにはほひのテント畳みけり
宝塚蘭定かず子

砂肝に串打つてゐる野分あと

寄合の月夜を帰る落し水

狛犬に秋の日傘の落ち合へる

月白やほとけに鍵を掛けにゆく

牛小屋の牛の流し眼盆の月
大和郡山城 孝子

髪きつく結はへて来たり施餓鬼寺

梅花藻に月の浮いたり沈んだり

野分中夫に爪切る仕度あり

コック帽に高低のあり鳥渡る

芋殻火の土器に雨たまりをり
八幡大山文子

らふそくを砂に立てあり川施餓鬼

送火の薄闇を来し回覧板

秋暑し弘法市の豆いろ
 秋の蝶東寺の市の砂ぼこり
 八月やみなはるかなる祀りして
 ゆつくりと糞も巡りぬ金魚玉
 花火師の顔照らしあふ向かう岸
 天幕の影の寄りあふ草の市
 新盆やひるの魂棚またいらひ
 虫籠の昏きに霧を吹きにけり
 七夕や湖底の櫛の水青く
 榎林に風の道あり魂迎
 枝でつつきしこの芋虫はあげはて
 帆立貝丸ごとぽんと輪つぱ飯
 避暑の子の前歯一本欠けてゐし
 天上へ小径のつゞくお花畠
 この川の浪花に尽きる残暑かな
 台座高く「考える人」秋暑し
 大判のハンカチを買ふ終戦日
 神戸深澤鱻
 宝塚山本耀子
 八幡丸山照子

選のあとに

山尾 玉藻

火星を毎月読んで頂いているある俳人からお便りを頂いた。

「火星の皆さんの句は肩をはることなく、情緒に傾かず、つましやかな景や行為を表現して、なかなか佳いと思います。楽しく読ませてもらっています」

火星俳句に対する客観的で好意的なご意見として嬉しく拝読した。同時に、私たちは一見容易なようで本当はかなり難儀な道を好んで選んでいることに気づかされ、私たちそれぞれが俳句に対する姿勢を改めて自己確認しなければならぬという思いを強くした。

肩肘を張って格別な思いを述べたり、ムード的な言葉を綴ることはさほど困難ではない。しかし、自分の身の丈に合った言葉で、また飾ることのない平易な言葉で、日常些事のささやかな思いを表現するのは意外と難しい。また残念ながら、日常の何もかもがそのまま俳句に繋がることは限らない。しかし、日常の何気ない景や行為には必ずものごとの真義と普遍が潜んでいる。それを掬い取りさえすれば必ず俳句に繋がるのである。

それではどうすればものごとの真義や普遍を掬い取れるの

だろうか。それには決して概念に囚われず、常に探究心、好奇心をもって日常を過ごす必要があるであろう。どんな時も「何故なんだろう」と不思議がり、「なるほど、なるほど」と面白がることを忘れないでいると、何ほどでもない日常茶飯事にも小さな感動や発見を見いだせるはずである。この小さな感動や発見こそがものごとの真義や普遍に通じているのである。

へまづ逆にはまはつてまはる風車 城孝子
これからも只ごとを只ごとで終らせず、単なる常識ではない大常識を掴みとる努力を惜しまないでいこう。

狛犬に秋の日傘の落ち合へる 蘭定かず子

何ほどの事柄でもないようだが、昨日までの「日傘」を今日は「秋の日傘」と感じさせる身辺の微妙な季節の変化を作者は見逃していない。「狛犬」の介在も清々しい。こういう俳句が只ごとであつて只ごとでない一句と言える。奇をてらい気分流されては、このような微妙なところを掴まえない。

野分中夫に爪切る仕度あり 城 孝子

野分の真つ只中になれば普通は気が張るものだが、ご主人はそんなことに関りなく爪を切る為のあれこれを用意されている。非日常にあつてこともない日常を展開する人物は落ち

着きすぎでいて、どこか可笑しい。爪切りという些事に大いに拘る「仕度あり」が更に可笑しい。諧謔自在である。
(以下略)

恒星圈

蘭定かず子

跳躍の胸反らしたる雲の峰
弁当を使ふ背なりし盆花売
てのひらの月に殖えくる踊かな
上がらずに子の帰りけり夕ひぐらし
ちちははに日々の菜園小鳥来る

飯塚 糸子

渡辺 数子

天王寺に祈願札漬く日の盛
星一つ生まれをりけり砂糖水
佐多岬沿ひに漕ぎだす炎天下
蚊の声に間合ひありたるお仏壇
稜線を登り下りぬ茅潜

ほととぎす山のホテルの螺旋階
柳生越え群れ咲く螢袋かな
向う岸に三人並ぶ遠花火
雲の峰朝からスープ煮てをりぬ
うづら豆浸すボールをいなびかり

米澤 光子

渡邊 美保

風鎮のひたすら垂るる残暑かな
スカート以案山子に列車通り過ぐ
手花火のマッチ擦る母怖ろしき
鯖雲のしつぽの辺り伸び切つて
手花火やゆつくり喋る母のゐて

地ビールや切岸遠く灯りけり
くらがりを抜け炎天の天守閣
城門へ続く地下道つづれさせ
清掃の終りし土手の文字摺草
川浚ふ熊手のびゆくあめんぼう

獅子座

山尾玉藻推薦

川端俊雄

土用丑の日北浜に昼の月
昼花火はぜし船場の秋つばめ
日曜に葉月はじまる熟寝かな
太宰忌の朝に夕べに走り雨

奥田順子

日盛の六道の辻混みあへり
列につく婆に烈日迎鐘
目鼻なき地藏ばかりよ迎鐘
蓮の葉のいづれ傷ある草の市

笠置早苗

炎帝のふところに咲く龍舌蘭
苦瓜のさはやかにして苦きこと
居間の灯に浮きゐるゴーヤ二つ三つ
水馬しづかに流る月の上

藤田素子

おおきにをくりかへし言ふ生身魂
秋蟬のフロントガラスに当たる音
石段に座ればぬくし盆の月
炎昼の駅のカーブに沿ふ電車

涼野海音

別れ来て噴水の穂の鋭かりけり
峰雲やコインロッカー閉ぢし音
煙草吸ふ少年八月十五日
玄関に金魚の水のこぼれけり

松井倫子

蜘蛛の囀の松に吹かるる涼新た
九月来し宙をさぐれる蔓の先
栗いろのちりめん山椒後彼岸
アーケードのはづれ昼屋秋灯す

伊勢きみこ

祖母の手のおいでおいでと真桑瓜
かけねなき大暑なりけり瑠璃蜥蜴
ひさびさのひとり旅なり青棗
体調のもどる予兆や月涼し